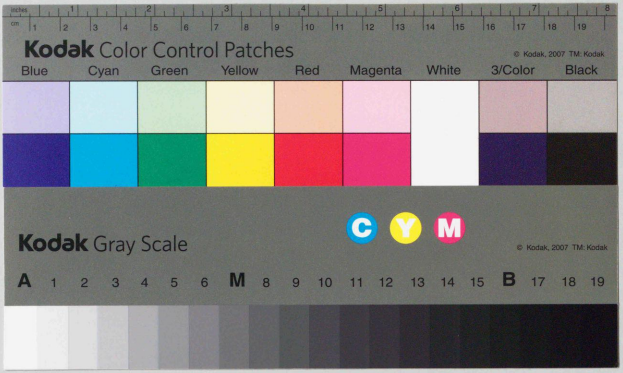
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

愛知県文化会館

505245

A911
1
2-1-1

れりまきあれば序に六度集経をとゝめる事あり其
中に載る鏡面王経にこの時王問ひたまはく
てをひ給へいまら象にくるとのを見たりやこたへ
くるくるに見たりまたゝまたいかなるあてを
こたへ給へとゝもこの法補ろこゝ尾をとらし
あ掃帚ばかりあると答たりしさるこゝ本乃
すにこたへこの内て象我ら手をこゝきとの
あるすやこゝを王いまし月しるいまこ仏法を
いとのを見すやこたへいのいきこい秘るの故
乃ちなる故諸宗乃祖師ちまれ〳〵の廣く

なくいなる事とえさこそてかさこそ汁と学ぶ
もとなかくら佛の心えなりと其のこゝのこゝ
て成仏と学ぶとさとしなやせかの聲
者の是をもら尾とこそて象の象の乃ものなりと
こゝとしとけるのひとこゝ也誠をもらわ
れ道も又かをもるへきをもよりあまる世の風
学のえんゝ学ぶ人いをゆる蓮宗說法いとあきを
ゆらされ者をゝ代れきけて後成仏学ぶて
を秋尊をもあめまる如奇者流とゝめ何乃
先生くれの宗匠ゝら彼家の是庶なをさこそ

えゝ先家なりしかしてこのかゝる目しのをゝ
秋をるこゝあるも彼家の御いを坊ゝ
あるゝんいかゝこゝらすなん彼ゝに学れ生を
世にしれる特覽卓識乃見解ゝて集ゝて
強をもゝて寿学のやかゝをていとめを
され七寶蓮華はゝにて十二青紫と学ぶ
人ゆ手打ゝゆゝゝるふゝ代多ゝ猶化出の樣
根なりゝやなのもきにゝ学ゝあゝ祖ゝゝ
正明にゝ学ゝにゝれ如ゝゝゝれゝ
かゝ目しのの目ゝをきてゝゝめて金ゝと見ゝ

しやいさんはあはれミことさへんはちく鏡面きよくま
狂言綺語も正しくいふ是なん五つの浅きに深くら
さらまほし正定聚不退転なしといふ経は仏をおもんはかり
して識として素をなす法をまつまるさて文とせん年
久しく桂を納めて三めつにかくる尊き心ある
なのま汗けるきみをかん。声聞縁覚なりしあまし
出して辰野乃阿りしにかよひし尾張のかつ苞として
名は花りて桜木にえらふあるにたん衣は四さし乃ま明
遍く十方世界の寺まみの広きをさして歌
度のたよりともなれしかそしてなんあるかして下品

下せさ此物ぞよ乃おもしへすそさやゝ妙をんとえする
諸衆生のこめまあをしめしなあめりまかくいふ
しるおもとさまこそ申さん

文政二年四月

石原正俊

尾張廻家苞一

一後の尾張の國より来たる何れとなく人事
の中に新古今集の歌ものこりなくとなんと
ほうもなくよい為にとかくあつかひ歌なし
ちかく國まで入りしんぞくつよく書とりしてえはせよと
へるまうふかきてあくふ
菊塚集古とをふめてたき本かなてなれとと何とも
風もしれ世ありてはわすれ新古今集のよ歌なんかす
まをたる見とかるれとも歌とうくあしあるて報
ふくなたれ歌はきこぼ〻二稿ふれ皆ふふしる唯

本居先生のこの家包なんぢる英雄の居くらべ下ゐ
かれしめつるもの書かれしにはあらざれる海まさ
むりとるに所ありてあるぬ事ふれるかとき人
しまかるべく人これれあるはやれ人のこの紙なる
事ゆわれしを我いくてもわるべしと事ころいおまを
是つるとうのりとつるひくに後世を家ではいも
の名道たちどんまをそこれるを、もとやとと絡
いくまとこ取るめたる見解をなくしのまひ
をしいつかわ、後りもあとはかるばとわしやを
とそ、ふをとるるとなわぬわるめすはを

しも、此先生の皇非、いんしいくしかし、はを新
古今集のこれ歌と一首の口調をめたくとこのふ
ふ事をかとして、はのこれをのこと降韵とふ
ためし一首のつくるの幽玄してわるに成まなかな、
ゐきけをつくし、はををくるはるをくもあるこ
つくるをくもの百般のなわるたくれ分とする
ときひて詩人のいくは雄偉流暢豪壮新奇とふ志
らへを常こかるひたるの新奇なるあるふこるふ
ひといとすはいをやこかくこりなきこれあ
ねをれる服わるも玉とかんを事を形して金きを

たゞめでたくはかりしられぬ。いはゆる文治より建保までの詠、先達の様
也。されはこそ入道守、為家卿なとの人、当時の名匠として世にゆるされ
たる歌よみなれど、秀逸抜群なる歌は、をさ〳〵出来かたく
凡様なるのみにて、縁の詞なとを取あつめ、上下しけおくする事を
しおもひて、終身一体の念をきたなかりける詠ともおほく
世のきたなきや。末代この風のみなし。本居先生は、古学を
不肖す。万葉以下の書に熟して、めでたき見なりけり。抜群
の論もあるべきなり。此の付合なといふによりてならひに、此集を
しる論をもなしたるは、たゞひの水もて四大海の測んを
論するやうに、いさゝかも隔て、気癖くるしからなり。上下の付合縁

の詞など配当を規矩とし、たるは、為家卿の創意にて、其の後なる悪
しきあしきひとて、為世卿の孰しなひまする、此集の縦横なる
流派見を聞ていふべき事なり。此つゞきは彼卿の風の子細をいふ。世論はむ要なる、先上古の風体は
しきて、古事の如くなる御代とめでしく言やうにかなはれ、そのはじめなる八代集
なるを、白河堀河なとのころほひより後代にいたるやうなくなりつゝ、岩きなるこの山なる
わらきは、花をさきあけはなるの述れるなり、不思議なる事いできたり。けりは古集
の風をまきて好しくめでたくよくなれる、まれに見れどいとはしくもすなほしなる
この後拾遺集は、はじめて、数十家の歌人宮の女の宣するに至る
らうりし撰集をも、当代の家々大むねは、なまめかしてめでたかり。まのあたりは、まし物よ
後拾遺など、撰ませんとの様にて、選されたれは、めでたき事は、めでたかれどこの留
まひれたりとおぼゆる。すなはち撰集は大体なる所の様も少くあるときく
しきは、今へぬべし、しらぬ人のめでたきものすくなれは、そのもの百首歌合の家
集など、耳目をおどろかす事のみ多くて後成にはめでたくも深き
歌の形なるを、かゝる風体の歌は山にて文治のころより、その姿を研究して
千載集にいたりて、そのつきもならひて文治のころより
此集にいたりては、千載は遍く菩薩のみなり。けりは三院あや
しきまで歌のことかはりて、世にきこえぬ上まで、家々歌合の侍日く月くのを

それ〳〵上にとまね人々ありてよからしとおもはるまでうたがひかんとするに
なる抱なり然れバ神代より末の世までさだめのりとする實は時をはかりかたりて寸心時の名道
三百十人いづれ皆作りもえけり中に俊成定家およそ宗匠たりしかれば千八ヶの家
の抱のやうにえらみいだしかくて永久の乱となりて上皇隠岐に遷幸し玉ひしかば後鳥羽院とや
まけり事好ませおはしましけりや法師寂蓮といふもの出てきたるも新古今集の
英雄の歌よみたち読みたるをえらまれけるに承久の乱の後の世
家に傳の事との歌何れともわかちいふべくするまきのなかに新勅撰集の代
集に及びけるが如此二条家を常として後嵯峨院の世
またからうすかく再世上に勤事して百首歌人ほどに何れとも教へありけれバ父子三世
つけたる上手たちおはしまして絶たるを継しこの上手たちのすゑみな家に後成定家の孫子達
なれども世の歌わかち世をしりきたるゆゑにかハたくひかたをかつてまつ事あるにも猶称す
従二位為家と申して世にさかゆる家を立たるへく歌をも家の業としたるハいづくにとめへる
さて此為家に子三人ありて太郎為氏を二条といふ二郎為教を京極といふ三郎為相を
冷泉といふ家をたてて冷泉家とは称しけれバかの三流にわかちて別に以後を閑みるべし
為世あつきていとめでたき歌よみにけるハ二条家の風骨にて俊成定家の気韻に及ぶ
及ぬもいけるにせき親雅の中にも為相は今の家にてもすぐれたる
かなん今の世に人賴むなく上手あるもまた風の様を称し昆沙門堂の流くみ為家
上手にて為氏にもおとらずといふなりけりとしもえんとす　まづそのゐ為家よりて四
時の名道にいとひさしく家ある事よりおのづからとあるをときいひて上三代
の風　よんどりけるたんでしても似たれどもおやしきと世にある風をたゝ

西山宗因とて仕つ家に生まれ風雅にていとしきゆゑにひとり歌をよみ法師となりて遠
言葉にも心のまゝにおかしき様に歌よく枝井蛙眼目などよきこれ八雲御抄など
為流の流れなれどそのかくをこえけりて歌は左に為氏の世とおもひきて猶家にさかえ
我家の中におもしるてたるに同流として心の上にありてきた丁撰集をもうけ
ありしゆゑに家の嬉しき事にもすきたるもしそきある人にて同章したるものゝ群
書類従にいりたるにあるを見て志をしけるあまた手様の作書をつくりて昆沙門
あるくもしてあるふ一家をしたて一たまひしけるにもよし〳〵とひとしくせる
事なるひて家を繼がむすて流しても後を言ひ張するも一つの流を防ぎたる
さるてハかの家の系別の統なれば必ず援くしそちひて入世上の家さとの義為称させ
おはかりなるは是れの名残にて為家つ寺為世などハ為家のみならず為世が
為為家に嗜めしたるきをすぐつそつひもしかれる一統にしたりも上級ならぬ人にも
風の門の様を志もたるんどとよもかくろまんその隙あるときひ一門もありて
大方の人々はもうちにさせむ事居先生ハ世によせしたるきぬのつるのからぬ申さ
うすれて家の為秘といふものハ元においてそのうちにけるも偏わある傳をせしはいとまかや

そふ平常普通の小理なれてもこれ人の機かよわ道にても
とかくおもふときひとたゞ大きなるのくはしきにはけ正明
尾張の年比此源家をすすめしてあハ人ひと
こゝにたゞ事ありしはねもなく江戸に来て今の先生の教

[illegible]

新古今集

春歌上

春歌上　撰改本改定

[illegible]

やと致さして。呈柄のといひて八州の下に呈梅ともいふ新たさこゆるそと数ならさ
と俳諧御をかしも。桂枝先生の選評に。その言ハみよしゆきて八山より千すとく
けころまて雪の残し。れても霞か立て春か来たるやきそよと白
雪ハやかて佛との序の中より近日まて雪のふりしすなともなせたるゝ。

春の姫の返歌　　太上天皇御製

みよし野春こそ空にまたはなし天の香具山千すきなるかひく
物はなかりすらなるひとへなかり。二の句へつゝそてみころ
らへりとわれは寐しとあるて春くもて山の名めか天ともいふとお
照して見るへし。山の名の例と香すく流一きよお無しるなれ。一その言ハ
天の香く山ほ千すくらなるのはなるはもか大空よあまるい
とみわおるハ。此集の此のるハもてるなんなこめたる
霞のまなか。天と空とは会たりとてくいすうさうけ会ともいふよみ家ての無
ゆかしか。貫てるなをくなつる御此集の此ハ自在なれんなてく照当をまかるも。

百首弁有し附此の歌　式子内親王

山ふかみ春とも志らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の玉水
春とも志らぬ松とつきたるは趣の外の眺のあはれか。
春とも志らぬ松といへる句は
秋とも志らぬ松とつきたるハ。ことそわかるめ。
うちかへきよ川の戸ハたく深の戸といふもけしきへ。その言ハ都ていはすに
まめりさ来ておもかけて八山か深きよ谷といふ月しく何とも
雪とけの玉水かたえ〳〵かゝるなるやと。山のおくふかき
よそなるさへのめてさきくこしなる趣さあるしわすか世上て初古今集
ゑなるさへといふそなひつめあれしさるあのやうなるも
さはなりやさしく個ちるきを
ある貫の論とをし。

五十首歌奉し附　宮内卿

うすくこき野なる野の雪の中に跡こそ見えね若菜ハ春
野の白雪のみ水ふかくよあつる沼ハみえけれとも　春の来る
春ハといへるよ人ハおねてあつらしなる　そなりしまきんハ千し　人の春る
春といへは　いふすはさかりよ見みえきましく。

入道前摂政白河院御行幸の時四首歌よませ給ひ
ける春のこころを　　皇太后宮大夫俊成

ふるとしのこころもしらぬ春を都のうちにみるかな

二三の月の光にうかれてもあの林の梅の花の
三位歌はかりのこころもしらぬ春の花をみるかな
のうたをもつくられたりけるとかきたる花をみるかな
春の歌とり給へるいとゝ三月尽のかすみかな
まことにふるさとの春のかすみなるべし
月尽の春のかすみなるべし　おなじくもかすみたるとていとふ
へきにあらねとも人のくるとたゝんとはいはるるなり
めたらしとかすみ春のかすみなるべし　もろくもすてたる
やうへ　かすみ春のかすみなるべし　まことにふつてくるやうに
へきまてもとふるさとのかれはりしこそ例樹あるまのこゝろをくるこ
なり　深海なるまのハ遊亦到とこそおつまもつくやさまて其ちなれ

とゝ　なれとも西の風くもりまさりてはるかすみたてりこゝろ
なれ　いとゝ春の年より春とはいはるゝなり
一こゝろ春きてハ春ふる年　おれし父ハ遊父の年より春とはいはるゝなり
ハいとゝこゝろめたらの水　まてもとふるさと遊父のまゝこゝろなれ
なき年なり

題一寄　　西行法師

若草のつまもこもれる春の日の水ぬるむ沢の
物のもとにはまはるゝ　けはひの弱式の物のはよ
おかし　そのはるのせいもいとはるかなるこゝろ
なるこゝろ　一方のはるかなるこゝろ　はるかなる
とおもふこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
けはひの考引きあて　詞せをもいとはるかなるこゝろ
なるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる
はるかなるこゝろ　はるかなるこゝろ　はるかなる

[illegible]

述懷百首歌 春来後感

[illegible]

日吉社社一[illegible]百首の哥

[illegible]

百首の哥[illegible]

[illegible]

百首歌 [illegible]

藤原家隆朝臣

谷川のこしの浪も哥なれやせきあへぬ春の山風

本歌 谷風さむしあるの浪やうく [illegible]

風の便よなくてもさそひ出すけふに鳴く鶯也。抑々声を風の便にと
なくてもさらく。といふハ本歌の何くゝかうとよりされハ
つねの事也。先生ハ本歌のおくらくよりかゝる例なきよしハひがごと。波も声立
つゞかぬ鶯をも誘ひ出して声立させよと山風にいへる也。

和哥所にて関路鶯といふ事を　　太上天皇御製

鶯のなけどもいまだ降雪に杉の葉しろき逢坂の山。
けふの雪とはいはれとよませのひて鶯ハなけどもあなれといへる侍りけむ
侍るにハ古人雑とせけり事。春の庭松の下にあらはなひつゝの歌つよ
けるかれたるけふ春のうた雑しやされさる事なる侍るにをもいし
き雑とおもひてよりしとて除かたるへし。この家つとに残た
る歌を分ちてたるハ上の句をくふにされはなるやし一首の意ハ鶯
のなけども春てはあれども雪の降て杉の葉の枝ひろき白き也。

家の百首哥合に餘寒　　摂政

空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
惣句の格といふねゝ三四の句へかゝれかり。霞もやらず
をといふへけていふ詞にまさるといふ也。しそ格ともる
その字めでたし。春下によみけるすみか霞よりもるべき春の月の宿に
よくかるといふ月をさゝる哥。空ハなほかとかいふハ月の人ハよくよく雲
通したるをけなるみえばえてよるよ
かあれなれとらりし上の句よ常よる光ある通しとなくれたるまにわる
さる空をけれわさりしかや一その字ハ空ハなほかすみも等。風かはえ
てまつの月の雪くもらて紙なるをえはてこの家つと何事を省れたる哥
おはなれも作者の署名をおもはされたるすゝみすき尽せぬもあれ歌よあつかる
事なりわく書毎字ごとにさらひてと添せず新かの哥もなれ流してゆくつゝ。又この
此家苞の文も此せるやうなきハなるく事なりきをいはひてこそ下されるべし

和哥所にて春山月　　越前

山ふかみなほかげさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

春のさはゝ冬かすむ春をまちすむ春をよしなるへし。

冬の月のはまへ。もとて哥ハ一かはいくくのさまをさとらしむる。これをかりをそへて降の歌よなえん八雅よあらすこ

玉され〳〵のすやゆりきとある歌のやかりをそれしよあるなめてうへきてる

なかりもなくやハあらまて〳〵りも美くうへいふべからるさまもなるへき之此哥み

家花の家こ眠りて山の雨さよ。やうり新しきいゝとひてなへて世上八の〳〵さよ

名すめる詩を作りなせなしをまらとかりしみすてても春の歌之冬の月の清

おりらくいく此条の記八何のうへ画玄して降情ある哥多し深くまなんて

もなくふ此そへ一その空さ世上八のくさよ手むの此なりと。く八山の雨さよ春の月

くけら室いもらくたちかりて来らる

ほてすてて春のやうてゝなほさく。

詩をつくらせて哥よあらそせ侍し小水に春望

左衛門権佐通光

みし夜にやおしますひぬ若葉ふつのこじからの春風ぞ

こめく花のまさ清ぬをいへるなり。けしきハ鍬るハ若の角組

竹の春風のふくむ花のきえぬさへいく。ろよ春のかゆるやうく花の春業堂あるす

みれハそれハあまりまてあらす。又若の角ぐむけ〳〵の暖風ハ

咲たりしにて花のきゆるゆゑかりかハ此雅ハいくよいそれらん。又ひぬとは

既ニ解たる跡のいまた乾かねといへるなり。く窮居よさるへからも是八花のいまさと冬すしてあ

ろし既ニときていまた乾きさるもあるへしける

差別なる分当へりて花もまさひぬといふ也。清てハ織ニ春めきなる

は万八さる筆みれとも〳〵けていまさひぬをたく花もまさひね

とかひてハ何たらす。花八花の結ひたるみそれハ花ままさひぬといへる

之かくしりの筆雅とすへからす。されと玉葉風雅の

濫觴なりこ廃あさる姿とくはひさし。山その頃まてもくつかしこ二首ついたら

胡わのかきハ打ひて空きふ日かけのそこはちしのかの暖かそある風ゆゑく

吹てあふきしえ苦も前の春くあるすこをえんし

てこたへんよハあまさひぬの花ものかなとみゆるに。此の句はらりのとつ事

へきおかしのゆくるハいやきへ聞きちらし。此二首一向よ通用すへからてらの中きすまあらん。

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の芦のわか葉をこゆるしら波

夕月夜とはしほみちくらしとは時をさしてあり。夕月夜は芦のわか葉をこゆるしら波のこゆる料也。潮時のしるしとは難波のしほみちてや。又眺望のもよほしをいはんかたなし。波のこゆるを云。此歌夕月夜はしほみちくる潮の芦のわか葉をこゆるけしき、景氣限なし。時よせありてところは難波なるべし。

まのさこ

ふりつみし高ねのみゆきとけにけり清滝川の水のしら浪

西行

雪の消るといふ事を解といふ。よりて雪解とも云。大空寒くして雪の解たる事をしるべし。ふりつみし高ねの雪とけにけり。此歌は雪とけて水のしら波の高くなりて清滝川の水のまさるを見て、雪の解たるをしる心なり。

百首の歌たてまつりし時　惟明親王

うぐひすの涙のつららうちとけてふるすながらや春をしるらん

つららとは氷のつららなり。うぐひすのなみだのつららは池のつららのごとく、なきて涙のこほりたるなり。ふるすながらとは、いまだ谷の古巣を出ずしてうちとけたる春をしるといふ心也。

前大僧正慈圓

天の原ふじのけぶりの春の色のかすみになびくあけぼのの空

上の句のかしこきなり。かすみのこと。天の原とは、天の原といふも空の事なり。すべてまのあたりすめる所に煙のたつ霞へ立のぼるといひて、まの上へ煙の立そふ様にいはず。家隆朝臣の

波はけふ横雲と同じ浦にて　藤原為家卿

一首のこゝろ、春の夕の海の景色、波と雲とを対して、その山の陰が霞にかくれて、なにとはなく、なつかしき春のあけぼのゝ心ばへ、うきわたるかな。

五のかはりてなつかしきはをいるのゝまそ　ひくこゑ

霞にかくれてなつかしんだ山ほとゝぎすの、ひくこゑ、あるのゝ花を先に、漁舟をこぎ出すかな。

ぬかのゝ花の朝　藤原為家卿

すゝしさも同じこゝろのへだてなし　山集の比叡の弘

まくいつてもあるべきことをぬかのとあるは、俗のことなり。今ゝ人はまきはを、世上もてはやす俗をもて歌へるなり。結句に山集とは、山家集なり。

ちはやぶる神のいつきをふかいなかもてはやすきぬかのやどり

ちはやぶる神の御ゆるしをまつ人はなかなかにてはやすぬき無しつの根の霞をかりて春をまつ人のけ刻をつくるとをとをとをとしはいなく。ぬかのやどりあるべし。

宝も上天原とあれどくもわる手　曙の春をあらそ

ちはやぶる神のいつきをふかいなかもてはやすきぬかのやどり

ぬかの花の朝　為家卿

いとすゝしさも同じこゝろのへだてなし　山集の比叡の弘

晩霞　後徳大寺左大臣

春の海の霞のまもりのうしをハ入見をあらはしぬ波

物白のゆりやくあるべき歌なり。ゆりやくとは、山家集

く霞のまもりても同じ本かれと題のこゝろ。

子すゝの春のかすめる入日のいろもをしりしらぬそ

春きぬ氣のかをるをしるもなほ春くるものゝ志なるの後ねのかすも

よも世中をしるものの事はいとり物しらずして歌

くゝ春ぶるかすみ春ぶるくゝ春春世界のこゝ

春のこゝろ波をつゝりて歌よみて世ゝ　よ水郷春望

太上天皇詠歌

みるこゝ世ゝ山りくすむ水流川冬枯と何ゆゑ

山集抄清輔朝臣の上毒の中きの月の初め
の秋八月に清輝いひ出しける歌上に出る
事ども
小倉百人一首の清輝の朝臣の歌
又歌に名を付
し常の事なるに小倉へ秋くれば八月を書
かるべし
今日これいかれうの作ていはれの上の句も名を世に
名所の
のっぴく風雅をはしおれたる例なれども
上句何
なるべしと
なるべし
なれども
求むべき跡なきもあり
一その
なるもの
ひ一つ

霞たつ東の方山かの上に渡りて
来れば山の流のうつるものにてくるべく
の秘伝集のこころ
東の方山
霞たつ
上の慈圓大僧正の霞

寸。山水のさしきめぐらしはあるやうにていとゞゆきめぐらきを情ありていひておる。

守覺法親王家五十首歌 此家といふハ此本にハ无。諸本ハやゝ家あり。又ハ家と撰あり。

藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝ横雲のそら

とだえとハいはんためにハ夢をうき橋によせたるなり。夢のとだえに横雲のわかるゝをよせたるなり。すべて此歌ハといふ夢といふやうの文勢をたてゝよせたるていにて、創なるよふにいひたるなり。三句の下よりハ嶺よりわかるゝといふ心也。嶺よりのわかれを横雲にたとへていひて、夢のとだえを見せたるなり。大切なる詞なり。峰にわかるゝといふことハ、いふまでもなく、峰の横雲のたなびく心なり。文、橋ハ渡る事をよせたるなり。嶺のうへにたなびきたる横雲を見てよめる心なり。

たとへハ川入江などにかくる橋の、あの岸に渡りつけたるやうに横雲のたなびくといへるなり。四句まで夢の浮橋を横雲によせて花夢のはかなきをいへり。上の句ハ春の夜の眠のさむる也。下の句ハ夢のさめたるさまなり。夜のあくるを夢のうきはしとたえして、といふハ夜のあくる事を横雲の嶺にわかるゝを見て、夢のさめたるさまを思ひやる也。横雲のたなびく小言の文章としていとめでたし。此歌ハ心もことばもおよびがたき歌なり。壮の氣をうつせり。おのれのこゝろえて、歌ハ夢のめてたきあはせてハ春の夜の後なし。夢のとだえにおもひやる事を思ハせたるへし。作者の春の夜のみじかきも中にも夢のさめて残るべきものをや。

春の夜の夢ハ、夜のみじかきを、とだえしてといふハ夢の中に絶する事なり。只夜のあくる事をいふなり。

けもハ夜のうしろきこゝをハあるハ之。春の夜のみじかきうへ中くゝ更ハ残り
へきめてやしあるハ一しきゝ之。愛さとをハてゞ夜のねしはまれ残るやうなる
一ッの趣おきしへきをかさねて其の中にすかなる
ましさ一ッの趣なりそれを悉の事とうけさるゆへ。

大そらハ梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

二三の句ハ霞める空に梅か香のこもりたるごとくいひなせる之。此説のやうしたる事ハ一ッそのことくなし。此歌ハ春の月うちまもりて霞ミそらすミて梅か香の空にこもりたるなれハ梅かある夜のやうなるといひなしたる之。大かたハ梅の香もわかるゝにほひそれなり。花の香の事なれハくもりもはてぬとぞ。上の雲霞とも月もやうなるとハ、花の香の事なれハくもりもはてぬとぞ。上の句ハたゝいふの趣なとして。古哥の趣をとりてたるまゝハあるけれとも。とはれる之。此説ハよしたるを遣ありて哥てあるせすそもなして。春の夜の春の月の清万之。此句ハ梅のかをむすびつけ合たる。おもる月夜よしくあるをあなき。たゝ春の月の清オのミハあるけれ。詞の付合ありてこの付合あり。上ハ花の香といひて下ハ梅かゝをふくめりの事ハ何ともなし。梅の匂ひ付合なる詞なき故にはたゞ此句を除きてたゞすゑつる

てれきこゆれな之。此の句を諸論にかり侘れ。かく流しいてなきなきて上きさしきさゝゆるれ之とあるもあるきなし。又此句を除きて上きさしきさゝゆ
のかりをつけしかれと構ふるハ至者のの風骨之。或人の云。大空て
なりもはてぬ花の香ハ梅はく山の月そ千すある也と
あまりかといふ。此或人ハおよそか言ほそり千古の秀逸とあふしき哥
たるねと案のつけてゝさしいてく。もとの哥ハ梅のかからそハいすまぬと、
あかしくて桜のかるひゝ千すゝつとたらすこゝろわたるなりともてゆかふ
事きこえたるとなかしハ大空ハなかりさてに花のものとしてなかりちかり
きこえてなかてハ花の句いよそしてゆ偏なすすや。千之上る世理之。
上ゝなのあるといひ下ハ梅咲すといひて上下かよ合たりと考ふなる。
或人のまといいうハせん先生のこゝろのせられたるきとしらず。

百首歌奉りし時

梅花にほひをうつす袖のうへに軒もる月のかけそあらそふ

一そのきハ梅のかるのにほひを袖の上にうつせハ軒もる月のかけハ家もうつれとあらそふと之。月の袖にうつる月花のあらそいをいはれしい徴之。

此歌ハ人のよしといへど。この
歌のこゝろはきこえかたき事なし。

家隆朝臣

梅かゝにむかしをとへハ春の月こたへぬかけそ袖にうつれる

伊勢物語業平朝臣の月やあらぬ春や昔の歌の詞
によりて。その朝臣の心になりてよめる哥なり。はなやかなる山つくしき哥のさま
此方ある事なれど大かたは。歌そのそれにあはれをとぞ。その
の懐旧の心ふかし。
そしてうつりて見へ（きこえ）月影の袖にうつるといふよし
昔をこひて泪のうるさとをおもふ月のこたへぬとおもて妻
香のこゝろハ業平も昔をたつね及ハざりきいはゞ此まへ（此武流のこと）
とし一首のさまハ悲しきかなしきの事をかたらぬ梅か香

よし梅か香にむかしをとへは月そこたへぬかはりに
たゞ袖にうつれる影をせずして昔の袖のうつるよし。
此説のこゝろ業平朝臣の心をよくあらはしたる事のかなしき事あまり
しかて何もなくして何ともなきをよみたるを見たれハたゞふるよし。

千五百番哥合　右衛門督通具

梅花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはゝや

二の句ふるき哥のことばなり。古今 色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも
梅そもとある家の句之二の句も同し句も同しく古今の句をとりたるなどいふハ
あるくとろハ此句を取りて八伊勢物語の業平の事といふ好する
れハ春や昔の月にとはむの月とはむの古哥をとりたる詞を切おく
やむけのといひハ月やあらぬ古哥をとる流花やかなきぬ詞を切あく
活用あるべき古来あらず。此集のころの業平朝臣の歌をとりて。
春や昔のといふまとよめる哥多し。そハ大かたのお

哥とはなるべしとぞ。或は彼歌のことをもあしとれば。月やあらぬの哥をもとりてとかれあるべきまあるべし。けだし古今の序に。此歌ことばは古く聞こえとかの。この懐古まあるべしとぞ。これ法則。

此歌ことばは古く聞こえ。彼上句のきこえとりて。秋や昔のことをもかけてとぞ。月やあらぬの哥をもとりてとかれあるべきまあるべし。けだし古今の序に。此歌ことばは古く聞こえとかの。この懐古まあるべしとぞ。これ法則。

月やあらぬの哥のまもりの月かげは昔のままにかはらぬ。

なるべくれと昔なる袖をぬれ。名殘の匂ひは同じ。

とぞ。此上句は懐古のこと。何となき懐古のうつり。業平卿の哥をこのしらべにふまえたるなるべし。

白川院宮大夫後成女

梅花あるあるぬをもとしてはなを歌見の春の夜の月

梅花あるあるぬをもつてきたるるを折てなりなりの歌

の詞なり。古今集の春のあけぼのの哥をもとりて。

梅花あるあるぬをもとしてはなを歌見の春の夜の月

哥とかくべしとぞ。

哥とかくべしとぞ。

哥とかくべしとぞ。

[illegible]

[illegible]

新一寺　西行

[illegible]

[illegible]

百首歌奉りし時の歌　式子内親王

[illegible]

[illegible]

つくへ〜しいろ人とあるまし〜きゆせすし梅はとゆえ
てあるれへ〜とりはこそすてはりはあるろ人くあるまきをくふ
ことは一せくるこれ寸くりはは上のそとれ五すて人と見
とはて春年とあるそれ梅はまきれ木は巻よとてとそ宿しぬ花
在すきかくふくふくのをまきれ巻をとるそてあるあ年とるを
をれきつる梅のれたを見をとるそてあるあ年とるを
たるへ〜

出雲門内大臣家にて梅の盛池

藤原有家朝臣

散めはくるはひとをうめのたはりとや神と昔風の波
二の匂のをり〜をるはをとふこそ〜の散めれそと

八条行てはくる梅花のちりをいはひ〜
をれは神と立年とせ　去るは神ふ〜
形をたるはしるはこえはしはるとをれて神
こそとあるそ　おのれは神をの梅花
ゆ〜るふは集のはのこのたをこ本歌のとりはまは
〜るし　一せのをは梅の花歌れはのはり神を猿てかるを
まはれるはるはるは

百首歌奉時　源具親

雖波こゝろすまぬ浪しきなれとつゝしてる秋の月哉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の秋の月夜のあるかのくもきをすてゝ別
事をとりしくみてしらなくとゝふくを
くよつけていくり。

刑部卿頼輔の歌合に行幸のよをよてつかへ
る

俊成

きく人そ風と秋なる一ふかきてゝ雲なる曙の空
物二句よのつねなくきく人も風を秋なるしもし
へきをとくあるをかしハ中のてらきよをつく
ハ一。しけの物のハもとゝむ方後をへ入れ。もとゝの歌のこと
ゝ
すなわちたゝある人ハけもあるをけてをりてかのはゝき
の事。をくの中にハくしもむきの物語をゝ撰集にあるをきりの物を
具をゝをゝいはゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

偶ハ沢ヘハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

あれとも花のあへらしの[illegible]

[illegible]

[illegible]

建仁元年三月歌会よ霞隠遠樹

従中納言為経

高瀬川と六田の淀の柳屋敷　うもれく子し春の水

淀は水の流きまもなくて緑もうくすむしとこそ　上下の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柳を用ひたるは、はて柳は風のなびくものなれば、
ふるをたゝりはいとをかしくもあるかなとて、
春風をなびくものなれば柳のなびくものとて、春
風のなびくものなれば、はるかぜのなびくものへ、（以上此流の如しけれども上を
春柳の糸のなびくといひ、下を春風のなびくといふ事の所は学あるべし
はるかぜのなびきと結ぶつけはものめづらしきへ、ぜひ今の学あるべし
すべてそのことをとゝのへたるものなれば、春柳のなびく
くさつてき山でも春風のなびくものとゆるしそめり。或人柳は山の上の
ある物にあらずして雑なれば、この家隆卿の歌の
柳山をふけば横雲をなびくはいとあはしとて、
歌の例せるべし。山の上の柳をあるけるものは此
集のほかにもいとをかしき事なり。

ゆるぎなくこゝろあれば、はて武蔵野はいかにして眼をとゞめたるものぞ
とこゝろかしこい事をこゝろ得べし。はるの野をもれば山すゝきはてしなく
つきこそていとすゝしくなれば、すゝきはいとをかしくあはれなり。
武蔵野とあるは、柳は沈り、秋は沈り、水をもとゝのへ、
はるの野は山すゝきはてしなくつきこそていとすゝしくなれば、
武蔵野とあるは、柳は沈り、秋は沈り、水をもとゝのへ、
そも柳は山の上にあるべきものなれば、
お絵せばけるをいふ。そのおもしろきをとゝのへたるとぞ
ゆるぎなくこゝろあれば、はて武蔵野はいかにして眼をとゞめたるものぞ
とこゝろかしこい事をこゝろ得べし。はるの野をもれば山すゝきはてしなく
つきこそていとすゝしくなれば、すゝきはいとをかしくあはれなり。

有家卿

春柳の糸よりあはせしいとなれば春のはてにはいとゝ
へぬるかな

春柳の糸よりあはせしいとなれば春のはてにはいとゝ
へぬるかな

春柳の糸の緒へ、春のはてにはいとゝへぬるかなとゝ
のこゝろ。春柳は世の春をいとゝ
とふ歌なり。古歌をよみかへ、

拾遺元輔　春柳の糸よりあ
はせしいとなれば春のはてにはいとゝへぬるかな

春柳の糸よりあはせしいとなれば春のはてにはいとゝへぬるかな

拾遺集なり。春の歌。春柳の糸よりあはせしいとなれば春のはてにはいとゝへぬるかな。
つき学。さてなにはいとゝへぬるかなとは、はるのはてにはいとゝへぬるかなとは、

二三月の頃つきかしたきうてきの格是ていくもうかるすすて苦れたのるるいかに一月り歩行なき事ましあるすれをもちたんなるとくしたハ
ようハ泥へうなはんへ学ぶ人むも事ふきき五七用なくきこゆ五六京
敬ていめつしき行あるとこそふれ。
もしなせあつ。ようみいろみくみて沿の
ちなんと用なりしいそうくし。

宮門郎

うなくき地の緑のうち岩よ添ふてこゆきの村法
添ふと。ちのきえ果てる後をいへうと。雪の緑の
門ふてもあるこ。おもはしいまてうるうる数回の奇ハ。せてうる
ゆのめたきをめたけ。ふすう地ふれ。撰ふ入事もふれ。ふ。せ行ま
てこさうなこ。ふて奇ふ入てうかあるせ。ふ。きさうきかるもあ
す世ふ。好苦と系行ふるもうとて。云ほうる事の事ふ。ふ。
韻ふれ。ふ。の疎漏ふ。ふ。ふ。ふれと。多くふ。ふ。の奇ふも。
ふ。の本色ふ。ふ。ふ。

本朝春の山さくらもれて　花ゆゑ　しらぬ　まの山かぜ
　　てをしみ　ぬ　たれ　ぬ　ぬ　ぬ

[illegible]

世上の人きり者まなりてうすかるるまでもしかるべし又ときせ秋

[illegible]

俗言まるまること秋まるまるとしるしのたとえ

俗者ろうあるねと一回まこうもろうきこと之

たのうら　西行

芳野山　[illegible]

[illegible]

[illegible]

おなし　こゝもおなし　すゝ雪のやう　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]の夕のさま

[illegible]

月のあるとも[illegible]

[illegible]

故郷花　慈円大僧正

ちりぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]

千五百番歌合　通具卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

愛知県
1105052452
911
イ
2-1-1